

## 原著論文

持続可能な多世代共創コミュニティづくりに向けた

多世代演劇ワークショップのもつ可能性

Potential of Multi-generational Theatrical Workshops Toward the Creation of  
Sustainable Multi-generational Communities

渡邊 奈穂<sup>1)\*</sup> 岡崎 研太郎<sup>2)</sup> 蓮行<sup>3)</sup> 渡辺 賢治<sup>4)</sup> 井上 真智子<sup>5)6)</sup>

Naho Watanabe<sup>1) \*</sup>, Kentaro Okazaki<sup>2)</sup>, Rengyou<sup>3)</sup>,

Kenji Watanabe<sup>4)</sup> Machiko Inoue<sup>5) 6)</sup>

1)東京慈恵会医科大学医学部看護学科 2)名古屋大学大学院医学系研究科地域医療教育学寄附講座  
3)大阪大学大学院人間科学研究科 4)慶應義塾大学環境情報学部 5)浜松医科大学地域家庭医療学講座  
6) 静岡家庭医養成プログラム

1) The Jikei University School of Nursing 2) Department of Education for Community-oriented  
Medicine Nagoya University Graduate School of Medicine 3) Graduate School of Human Sciences  
Osaka University 4) Keio University Faculty of Environment and Information Studies  
5) Department of Family and Community Medicine, Hamamatsu University School of Medicine  
6) Shizuoka Family Medicine Training Program

## Abstract

This study explores the experiences of participants of multi-generational theatrical workshops, considering the efficacy of such workshops in building ongoing, sustainable multi-generational communities. For this study semi-structured interviews were conducted with 12 participants about their experiences in the theatrical workshops, and interviews were analyzed employing the Modified Grounded Theory Approach. The results revealed that through the impromptu theater performances participants experienced 'level relationships unhindered by differences in age' and 'the realization of interactive, bilateral communication'. While a newfound 'respect for the prolific knowledge and experiences of the elderly' was observed in the younger participants, senior members felt 'a respect and affection for those from different generations' and 'an appreciation for the participation of the younger generation'. Furthermore, participants experienced 'a unity towards theater presentation', 'close familiarity with members', and 'the encouragement from being recognized by other' through their final performance. These results, which gave rise to respect for others, rapport transcending generation, and deepened inter-generational relationships, attest to the value of multi-generational theatrical workshops towards the creation of sustainable, multi-generational communities.

## 要旨

本研究では、多世代演劇ワークショップの参加者の体験を探索することで、持続可能な多世代コミュニティづくりに向けた可能性を検討することを目的とした。多世代演劇ワークショップに参加した12名を対象に本ワークショップの参加体験に関する半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリーアプローチにより質的に分析した。その結果、参加者は即興を交えた演劇を実践することで、《年齢に囚われないフラットな関わり》や《双方向コミュニケーションの意識化》を体験していた。若年者では《高齢者の豊富な知識と経験に対する尊敬》がみられた一方で、高齢者では、《世代の異なる他者への尊重と慈しみ》や《若い世代の参加への感謝》の感情が生じていた。さらに、成果発表を通じて、《演劇発表に向けた結束》や《メンバーへの親密感》、《承認されることによる励み》を体験していた。多世代演劇ワークショップを通して、世代を超えた親密感や他者への尊重が生じ、世代間の交流が深まっていたことから持続可能な多世代共創コミュニティづくりにおいて有用である可能性が示唆された。

キーワード：演劇ワークショップ 多世代コミュニティ 世代間交流 未病

Key words : theatrical workshops, multi-generational community, intergeneration relation, Me-byo

## 1. 序文

わが国では、少子高齢化や人口減少、経済の不安定性、医療費の増大などの多面的な課題に直面しており、環境と調和しながら、多世代や多様な人々の **well-being** が持続するような、都市や地域の再設計が求められている。市場経済の発達、科学技術の進展、公的サービスの拡大などによって、かつては地域の人々が協力し合って実施してきた多くの事業が、商業的に実施されたり、機械化されたり、公共部門によって供給されたりするようになった。その影響により、地域の人々が協力して何かを行う機会が減り、地域コミュニティの弱体化や財政の負担増大につながったと考えられている[1]。そのため、子どもから高齢者までの多世代や多様な人々が活躍し、将来世代も見据えた都市・地域を、世代を超えてともにデザインし、多世代共創コミュニティを形成することが必要である。

多世代の交流によって地域の世代の異なる人々を互いに活用することは、互いの身体的心理的社会的 **well-being** が増加し、地域共生意識が向上することから地域におけるヘルスプロモーションや地域づくりに有用である可能性があることが示されており[2]多世代の交流が注目されるようになった。

近年、このような課題を解決し、持続可能な社会を実現するために、世代を超えた健康増進、疾病・介護予防活動が検討されている。神奈川県では、現在の心身の状態だけでなく将来の状態をより健康な状態に近づけていく「未病の改善」に向けて、企業や大学・研究機関、市町村等と連携して次のような取り組みが進められている。たとえば、ライフサイエンス分野の産業や研究機関の集積が進んでいる強みを生かして、産学官連携により、革新的な医薬品・医療機器・再生医療等製品の開発・実用化に向けた取り組みが進められており[3]、民間のウォーキングアプリと連携したウォーキングキャンペーン等、先進的な取り組みがされている[4]。そのなかでも高齢化率39%の神奈川県A町は、「未病に取り組む多世代共創コミュニティ」をめざし、2015年より各種の住民活動が展開されてきた[5]。「未病」とは、生まれてから死に至るまでの間の健康状態から病気、介護に至る、どの段階においてもそれ以上に健康状態を悪化させないという幅広い概念である。よって「未病対策」は疾病の「予防医療」や健康状態を向上させる「健康増進」に止まらず、病気や要介護状態となった後の進展予防をも含む概念である[5]。

我々は、A町における未病への取り組みの一環として、多世代演劇ワークショップ「多世代ふれあい劇場」を2015年より実施している。演劇ワークショップとは、演劇を集団でシナリオから創作するプロセスを重視し、多様な価値観の擦り合わせを体験するワークショップ型(参加型・体験型・双方向型)の学習プログラムを指し、学校や職場のコミュニケーション教育などで用いられている[6]。演劇をつくる活動は、想像力や発想力、そして発想を実現する力があると考えられ、演劇的手法は、「多様性の理解」に強い力を発揮し、様々な価値観があったときに、それをひとつに集約するのではなく、価値観はバラバラなままである種の暫定的な解決方法を考えだすもの[7]とされている。

コミュニティづくりや地域保健の分野においても、演劇を用いた活動事例の報告は多い。演劇ワークショップの代表的な例として、1970年代にJonathan Foxによって考案されたプレイバック・シアターが挙げられる。これは、楽しみながらお互いに知り合い、自分自身の心や身体に目を向け、誰かの語る言葉に耳を傾け、時に遊び心や想像力をつかって誰かの気持ちや経験を受け取り、表現するというものである。このプレイバック・シアターは、コミュニティのなかで人と人のつながりをはぐくむ場として、高齢者の回想療法や地域課題の分かち合い等、趣旨や目的によって様々な形で活用されている[8][9]。

神奈川県では、2017年3月に未病改善の新たなステージの取り組みとして「かながわ未病改善宣言」の中で3つの取り組みを掲げている。口腔機能を大切にバランスの良い食生活をおくる取り組みである「食」、日常生活の身体活動やロコモティブシンドロームの予防・進行防止、適度な睡眠を組み合わせた取り組みである「運動」、及び人と

人との出会い・ふれあい・交流を進める取り組みである「社会参加」の3つである[10]。演劇ワークショップを活用した多世代のコミュニティづくりは、未病改善の取り組みのうちの一つである「社会参加」を促す一助となる可能性があると考えた。

演劇ワークショップは、演じることには抵抗を感じる人がいることは確かである一方で、幼児から高齢者まで、自己表現が苦手な人も含めて、どのような人もその人らしさを活かしつつ参加できる、つまり、多世代の人が何のスキルも準備もなく参加できる手法である。本プロジェクトでは多世代のコミュニティづくりにおける手段として、演劇ワークショップがもつ可能性に着目し、多世代の参加者が安心して参加できるよう、演劇ワークショップにおけるファシリテーションの経験が豊富な劇団俳優2名がコミュニケーションティーチャーとして、参加者の意見を聞き取りつつ協働でストーリーをつくり、参加者全員で演じるという手法をとった。このような演劇を用いたワークショップによる多世代交流への影響についての研究はこれまでに報告がない。

そこで、本研究では、未病に取り組むA町に焦点をあてて、多世代演劇ワークショップの参加者の体験を探索することで、参加者間の関係性の変化やコミュニティづくりに与える影響についての理解を得ることを目的とした。そのような変化や影響がさらに発展することで、将来的に地域における未病の改善をめざした持続可能な多世代共創コミュニティづくりに向けた変化が生じる可能性に関して考察を行った。

## 2. 方法

### 1) 多世代演劇ワークショップの概要

「多世代ふれあい劇場」と題した多世代演劇ワークショップを、第1期は2015年10月～11月（全4回）に、第2期は2016年10月～11月（全4回）に実施した。対象者は、神奈川県A町在住の住民で自らの意思により参加を希望した者とした。参加募集は町内広報紙での告知やチラシの配布などで行った。若い世代の参加を促進するため、町内の小中学校にチラシを配布し告知を行うとともに、第1期は町役場職員の協力を得た。将来的に町民が自主的にワークショップを企画運営できることを目指して、コアメンバーとなりうる町内の老人会役員や演劇サークルにも告知し参加を促した。

「多世代ふれあい劇場」は1回3時間、全4回(1回目：自己紹介ワーク・コミュニケーションゲーム、2回目：ストーリーづくり・配役決め、3回目：ストーリーづくり・通し稽古、4回目：発表会)のワークショップシリーズで構成されている(表1)。「多世代ふれあい劇場」の特徴は、劇団の協力によりコミュニケーションティーチャーとして活躍する2名の俳優がファシリテーションを行い、「未病」や「健康的な町づくり」をテーマに参加者の意見を聞きながら協働でストーリーをつくり、皆で流れに沿って演じる

という「即興劇スタイル」であることである。即興劇スタイルとは、参加者は決まった台詞を覚えて演じるのではなく、流れに沿ってその場に応じた自然なやりとりや動作を行うものである。多世代演劇ふれあい劇場のストーリーの概要については表 2 に示した。

表 1 多世代ふれあい劇場の流れ



表 2 多世代ふれあい劇場ストーリーの概要

ストーリーの概要	
第 1 期(2015 年実施)	架空の温泉町水河原町で、健康な町づくりプロジェクトのメンバーが集まり、1年間にわたり健康な町づくりに向けて奮闘する。健康的な町づくりプロジェクトメンバーが認知症の高齢者と同居する家族や人と関わることを嫌う独居高齢者との交流を通して「未病とはなにか?」「独居で近所つきあいがいいのはいけないことなのか?」「健康なまちづくりにはどのような働きかけが必要なのか?」を観客へ問いかける。
第 2 期(2016 年実施)	舞台は 200 年後の 23 世紀。23 世紀の未来人たちは、タイムマシンで時間旅行を楽しんでいた。しかし、タイムマシンを動かすエネルギー源である「チョイボール」を落としてしまい、「チョイボール」を探すために 2016 年の A 町を彷徨う。未来人は「チョイボール」を探しながら A 町の過去と未来を行ったり来たりして、健康的な生活を心がける A 町民たちに出会い、健康的な生活とはなにかを模索していく。

## 2) デザイン・データ収集方法

本研究は上記ワークショップの参加経験を探索する質的研究デザインとし、対象者に半構造化面接を行った。データ収集は、第1期ワークショップ後は2015年11月、第2期ワークショップ後は2016年11月に行った。面接実施時期は、対象者の記憶が鮮明なうちに面接を行う必要があることから、いずれもワークショップ終了から3週間以内とした。対象者は、演劇ワークショップ「多世代ふれあい劇場」の参加者のうち、全4回のプログラム中、3回以上参加し、本研究への協力を同意が得られた者とした。半構造化面接は基本的にはグループで実施したが、スケジュールが合わない対象者は個別に面接を行った。質問項目は、①多世代ふれあい劇場に参加したきっかけ、②一番印象に残ったこと、③他の世代の印象がどのように変化したか、④世代が違う人と関わることについてどのように思ったかである。面接は個室で行い、参加者の承諾を得てICレコーダーに録音した。倫理的配慮として、研究対象者には、研究の目的、方法、ワークショップおよび面接への参加は自由意志であること、匿名性の確保、研究結果の公表について文書を用いて説明し了承を得たのち、同意書への署名を得た。本研究は浜松医科大学医の倫理委員会（E15-162号）の承認を得て実施した。

## 3) 分析方法

面接の逐語録を作成し、本研究では、多世代演劇ワークショップ「多世代ふれあい劇場」の参加者の体験のプロセスについて焦点をあてていることから、木下によって開発された修正版グラウンデッド・セオリーアプローチ（Modified Grounded Theory Approach）により分析した[11]。分析過程では、筆頭著者(NW)1名と共著者(MI)1名の研究者2名で面接内容を検討し、概念名の抽出およびカテゴリー化を行った。

## 3. 結果

「多世代ふれあい劇場」には、第1期(2015年実施)は28名、第2期(2016年実施)は15名が参加した。第1期および第2期のワークショップ両方に参加した参加者は4名であった。ワークショップ後に面接の同意が得られた面接対象者は12名であり、うち2名が第1期と第2期ともに参加した。ワークショップ参加者の属性を表3に、面接対象者の属性を表4に示した。分析の結果、多世代演劇ワークショップの参加者の体験プロセスには、図1に示すように「開始時の世代間ギャップ」「演劇づくりのプロセスでの経験」「発表後の成果」の3つの段階が存在していた。以下、それぞれの段階について、概念をまとめたカテゴリーは【 】, その下位概念は《 》、具体的発言は『 』を用いて述べる。

表3 演劇ワークショップ参加者の属性

	第1期 2015年		第2期 2016年		総計
	男性	女性	男性	女性	
幼児	1	0	1	0	2(4.8%)
小学生	1	1	0	0	2(4.8%)
中学生	0	0	0	1	1(2.3%)
20歳代	2	6	0	2	10(23.2%)
30歳代	1	0	1	1	3(6.9%)
40歳代	0	2	0	1	3(6.9%)
50歳代	0	1	0	2	3(6.9%)
60歳代	0	3	0	1	4(9.3%)
70歳代	0	7	0	1	8(18.6%)
80歳代	1	2	1	3	7(16.3%)
	6	22	3	12	43

表4 面接参加者の属性

n=12

	20歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代
男性	3名	0	0	0	0	1名
女性	0	1名	2名	1名	2名	2名

### 1) 開始時の世代間ギャップ

ワークショップ開始時の認識としては、若い世代では『本当に何なんだろうという感じで。何をするんだろうみたいところがやっぱありましたね』(20代・男性)というように、多世代で即興劇をつくることへの「目的・成果」がイメージできないために居心地の悪さを感じ、【多世代で即興劇をつくることへのとまどい】があった。一方で、高齢者においては『(町内に)若い人たちがいるっていうこと、そんなに素敵な人たちと交流できることが嬉しい』(70代・女性)『初めて見たんですよ、若い子を』(80代・女性)など、【若い世代との出会いに高揚する気分】がみられた。

### 2) 演劇づくりでのプロセスでの体験

「演劇づくりのプロセスの体験」として、【即興を交えた演劇の特徴】【プロセスで生まれた感情】【得られた体験】の3つのカテゴリーが抽出された。

【即興を交えた演劇の特徴】としては、『最初はやっぱ上の人もいるんで、どう接したらいいのかなあって思っていたんですけど、でも意外と、劇とかやって多くの人と触れ合っていると、そこまで、友達感覚っていうわけじゃないですけど、やっぱそういったちょっと、話せるようになるというか、そんな気難しいじゃなく、結構気軽に話せるようになったかなあと』(20代・男性)というように、若い世代は世代の違う他者との関

わりに対して、初期には戸惑いや身構えを感じるが、演劇をつくる過程で打ち解けるといふ、《年齢に囚われないフラットな関わり》がみられた。さらに、『演劇って、例えば自分一人が目立って大きくやればいいんじゃないんだって（思った）、相手との呼吸を合わせて、それがすごく印象的』(50代・女性)というように、コミュニケーションゲームなどで他者と関わりながら演じることで、演劇コミュニケーションの特性に気づくという、《双方向コミュニケーションの意識化》がみられた。また、町内で開催されている「チャレンジデー」という住民総参加型のスポーツイベントの普及活動を日常的に行っている参加者が、演劇のなかで観客に向かって「みんな、チャレンジデー知っている？」という問いかけをしたことについて、『(発表後、演劇を鑑賞していた人に)「チャレンジデーの宣伝するように言われたの？」と言われて。「言われないわよ。全部、自分の気持ち」で答えたの。(演劇で)思いっきり自分(日常で取り組んでいること)が出せた』(70代・女性)というように、即興劇では、例えばチャレンジデーの推進や、パークゴルフ、独居高齢者の訪問など、参加者が普段から取り組んでいることや、健康的な生活のために工夫していることなど参加者の日常の経験を演劇のシーンに盛り込むことで、参加者の《在り方を活かした創作》が行われていた。また、参加者は演劇をつくる過程で未病や健康づくりにどのように取り組むかを模索し、自分なりの考えを持つに至り演じていた。『未病、未病って今までも聞いてはいたけど、それほどね、いろいろ真剣に考えなかったけれども、ここに参加させていただいて、未病ってこういうことで大事なんだなっていうのに、まず気付いて、周りの人にも説明がある程度(できたと思う)。それまで、未病、未病言ってもね、なんとなく上滑りだったけど、それは一つ収穫というか。経験させてもらって良かった』(70代・女性)や『(未病について)思い出したり、ちょっと考えるきっかけになったりすればいいんじゃないかなって』(20代・男性)というように、観客である他者に、演劇を通して「未病について考えてほしい」という思いを表現するという《メッセージ発信者への変化》をしていた。

【プロセスで生まれた感情】としては、若い世代においては、『Aさん(70代・女性)が何を振っても、ちゃんと軸がぶれなかったの、私たちは安心してそれぞれの役に徹しました』(20代・男性)というように、《高齢者の存在に対する安心感》を抱いていた。また、『例えばちょっと年配の方だと、やっぱり自分の意見をすごく持っているぶん、変わりづらいついていうんですかね。すごく臨機応変に変わる人もいるんですけど、やっぱりすごく自分の今まで生きてきた、そういうものがすごく大事に持っていたり、経験を持っていたりしているんだなあって。それがすごいその人にとって財産になっていて、それぞれもしかしたら違う所で会ったら、その意見私には合わないとかっていうふうなことがあったかもしれないんですけど、でもそういう人を尊敬して見られるよう



な気持ちになれたかなあと思う』(20代・男性)というように、《高齢者の豊富な知識と経験に対する尊敬》の感情がみられた。さらに、『やっぱり老人会の人たち(高齢者)がすごい考えて動いてくれていたし、その日常の活動っていうのも、練習の中で何回も話されていたので、そういうのはやっぱり多世代で、実際そういう人たちがいる中に入っていないと、聞けなかったなあっていうのが感想です』(20代・男性)というように、《高齢者の考えに対する関心》を持ち、『違う世代の人とか、今までちょっと分かり合えないかなと思っていた人も、見られるような気持ちになっていますね』(20代・男性)というように、《高齢者に対する先入観への気づき》を感じていた。一方で、高齢者は、『子どもは大人が指示じゃないけど、こうしたほうがいいのか言ってあげたほうがいいのかってちょっと思っていたんですけど、でもそれぞれ自分いろいろ考えていて、自分からやってみようっていう、そういうのを助けてあげるっていうのも大事なことかなって、そういうふうに色々な場面でその人を生かしてあげられるふうな、認めてあげられるような気持ちに、今はなれている感じがしました』(60代・女性)というように、《世代の異なる他者への尊重と慈しみ》を感じ、『(若い人が)みんな一緒に取り組んでくれているなって。みんな一緒にやる気になってくれて感謝している』(80代・男性)というように《若い世代の参加への感謝》をしていた。

【得られた体験】としては、『(お芝居の内容を考えると)ちょっと煮詰まっちゃったところがあって、ここに違う世代の人がちょっと入ったら、また違ったってことは、やっぱり多世代だといっていることですよ。同じ世代の人でやる演劇じゃなくて違う人が入ると、ちょっと新鮮な目ができるのかなあって思ったので』(20代・男性)というように、多世代で未病や健康的な町づくりについて意見を出し合い、劇を創作することで、《多様性から生まれる発想の広がり》がみられた。さらに、『私たちだけではやっていけない、子どもだけでもやっていけない(と思う)。助け合っているのも、私、昔から、人という字は支え合っているっていうのが信条だったので、まさしくそのとおりかなと(思う)。』(50代・女性)というように、《人と人との助け合い》が演劇づくりのプロセスにおいて自然と生まれていた。また、『練習の時にちょっとかみ合わないなっていうのがありつつも、でも最終的にはまとまったなっていうのがちょっと印象に残りましたね』(20代・男性)という発言にみられるように、若い世代では高齢者との話のペースやタイミングの違いを「何か噛み合わない」と感じる一方、それを受け入れ楽しむという《世代間ギャップの受容》が行われていた。

### 3) 発表後の成果

「発表後の成果」としては、【演劇発表による肯定的感情】【新たな関係性の創出と町への希望】の2つのカテゴリーが抽出された。

【演劇発表で生まれた肯定的感情】としては、『4回しか会ってなかったようには思えないぐらい、親しくなった気がしました』(20代男性)というように、多世代の参加者同士が短期間で《メンバーへの親密感》を得ていた。また、『わずか3日(の練習)ですごいわねって言われたから、まんざらでもない気分だった』(70代・女性)といった発言があり、劇を演じたことを他者からの承認を得ることで喜びを感じ、《承認されることによる励み》を感じていた。

【新たな関係性の創出と町への希望】としては、『3回(の練習)だけで(発表を迎えるのは)最初はとて不安だったんですけど、回を重ねるごとに皆さんの結束力がすごくて』(20代・男性)という発言にみられるように、演劇を作り、短期間で完成度を高めて発表する過程を通して《演劇発表に向けた結束》がみられていた。さらに、『ワークショップで知り合ったAちゃん(高齢者)に学童保育で(子どもたちに、今度)パークゴルフを教えてもらうことになったんです』(40代・女性)など、多世代演劇ワークショップ終了後も参加者間での《交流の継続》がみられた。さらに、『若い人たちがそういった所(多世代ふれあい劇場)に出てくるっていうのは、A町にも明るい兆しが少しあるのかなって。見捨てたものじゃないなって。やっぱり多世代いてこそ共存するっていうのがあるじゃないですか』(50代・女性)というように壮年期以降の世代は若い世代との交流により、《町の未来への明るい展望》を抱いていた。

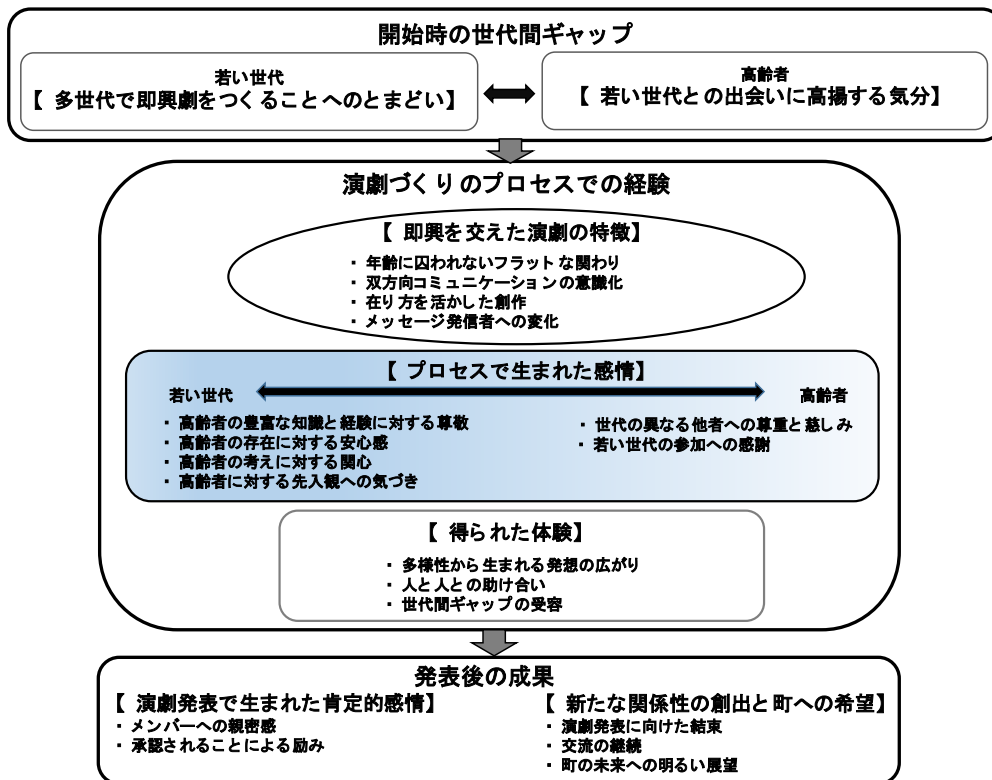


図 1 多世代演劇ワークショップの参加者の体験プロセス

#### 4. 考察

##### 1) 多世代演劇ワークショップへの参加による心理的体験

本研究では、未病に取り組む多世代コミュニティづくりを目的とした多世代演劇ワークショップを開催し、その参加者の経験から、若い世代、高齢者ともに多世代交流の意義を見出したことがわかった。若い世代は、ワークショップ開始時は「とまどい」を感じていたが、演劇づくりのプロセスにおいて、《年齢に囚われないフラットな関わり》を経験していくうちに、《世代間ギャップの受容》をし、《高齢者に対する先入観への気づき》や、《高齢者の豊富な知識と経験に対する尊敬》を抱き、《高齢者の存在に対する安心感》をもつなど認識や感情が変化していた。Ivey らの研究では、未就学前の子どもと青年が高齢者施設を訪問し、歌を発表したり高齢者の話を聞いたりして交流することによる子どもと青年の影響について調べている。これによると、高齢者との交流後は、未就学児は高齢者を「受け入れてくれる存在」と捉え、青年は高齢者をポジティブに捉えていたと報告している[12]。さらに、高齢者と児童のボランティア活動を通じた交流における、児童の高齢者イメージに関する藤原らの研究では、高齢者ボランティアとの交流頻度が高い児童は高齢者への肯定的なイメージを維持していた[13]。これらの先行研究にみられるように、本研究においても、若い世代

にとって、多世代演劇ワークショップを通して高齢者と協働することで高齢者へのイメージの改善や高齢者の生活への理解を深める機会となっていたと考えられる。

多世代交流による高齢者の **well-being** への影響はこれまで多く研究されてきた。たとえば、亀井らが行った都市部の高齢者と子どもを対象とした多世代交流型デイプログラムの効果を検証した調査によると、多世代の相互作用によって高齢者世代の孤立の予防やうつ改善に有効であり、高齢者の心の健康に良い効果がある可能性が示されている[14]。さらに、藤原や Murayama らの研究によると、高齢者の子供への絵本の読み聞かせをするという "REPRINTS" と呼ばれる世代間プログラムで世代間交流を通じた知的なボランティア活動をすることにより、社会的サポート・ネットワークが増進し、地域共生意識や抑うつに効果がみられた[15][16]。また、同様の "REPRINTS" プログラムを実施し、7年間という長期的な効果を調査した Sakurai らの研究においても、高齢者の知的活動や世代間交流の促進効果がみられた[17]。本研究においても、高齢者は若い世代の存在に気分が高揚し、《世代の異なる他者への尊重と慈しみ》を持つなどの肯定的な心理変化がみられており、若い世代とともに活動することに喜びを感じ、他世代への関心が高まっていた。また、劇を演じたことを他者からの承認を得ることで喜びを感じ、《承認されることによる励み》を感じていた。WHO の Promoting Mental Health Summary Report によると、**well-being** の要因として、①自分自身の能力を認識する②人生のよくあるストレスに対処する③生産的に働ける④コミュニティに貢献できることとしている[18]。このことから、多世代で交流しながら演劇を創作することは、高齢者にとってコミュニティへ貢献する機会となり、**well-being** の向上に作用する可能性が考えられる。

本研究では、これまでの地域における世代間交流プログラムと異なる特徴がある。これまでは、高齢者が子どもに絵本を読み聞かせる[16]、若い世代が高齢者施設へ訪れ高齢者に対するボランティア活動をするなどのプログラムが中心的に行われてきた[2]。これらのプログラムでは、「若い世代が高齢者を助ける」、「大人が子どもの面倒を見る」という「支援する側・される側」「教える側・教えられる側」の定型的な関係性が築かれやすいと考えられる。しかし、本研究で行ったプログラムは、多世代が即興劇をともにつくるという協働体験であり、年齢や経験による定型的な関係性とは異質のコミュニケーションが生じる。高尾によると、即興劇の協働性に関する参加者の変化としては、他者に対して心を開き相手を受け容れることが大切だと思うようになる、自分にとっては当たり前のことでも相手にとってはそうではない場合が多く互いのアイデアを重ね合わせることで新しいものが生まれるなどの変化があるという[19]。本研究では、参加者同士の《双方向コミュニケーションの意識化》が生まれ、

《年齢に囚われないフラットな関わり》がみられた。これは、即興劇という性質上、他者に対して心を開き、他者の言動やあり方をそのまま受け入れ、それらを演劇の流れの中で有効に用いることが必要とされることによって生じた変化であると考えられる。このような変化は、本研究における多世代演劇ワークショップにおける参加者間の関係性の特徴といえる。一方で、多世代が年齢や経験に囚われず、互いに他者を尊重し、対等な関係性を築くことが、持続可能な多世代コミュニティづくりにどのような影響をもたらすかは今後の検討課題である。

さらに、演劇発表を行うことを通して、どの世代においても《演劇発表に向けた結束》や《メンバーへの親密感》を実感しており、多世代演劇ワークショップ後は高齢者が子どもにパークゴルフを教える機会ができるなど《交流の継続》がみられ、多世代演劇ワークショップを通して新たな多世代の交流の場が創出された。2015年、2016年いずれの開催時においても4回のワークショップという短期間で多世代の交流が深まったと考えられる。地域包括ケアシステムの4つの構成要素として「自助・互助・共助・公助」が提唱されている[20]。多世代演劇ワークショップは、協働して演劇を制作し発表するというプロセスと結果を通して、多世代の交流が深まり、結束や親密感が高まることが示され、地域住民がインフォーマルに自発的に互いに助け合う「互助」の促進に役立つ可能性が示唆された。

## 2) 多世代演劇ワークショップと多世代共創コミュニティづくりに向けた今後の展望

本研究は、多世代コミュニティづくりをめざす上で、多世代が参加する演劇ワークショップが参加者にどのような体験と関係性の変化をもたらすかを探索したはじめての研究であり、今後のその可能性について検討するものである。参加者同士がワークショップを通して出会い、声を出し、身体を動かしながら、相互に尊重しあう双方向コミュニケーションをとることで新たな小さなコミュニティを構築することにつながった。これを契機に、将来的にさらなる活動を通して、より広範囲かつ強固な多世代コミュニティづくりに資する可能性は考えられる。

しかし、今回のプロジェクトで実施したワークショップの成果には、ファシリテーターの特性や力量による影響が大きい可能性は否めない。演劇ワークショップの手法にはさまざまあるが、本研究では劇団に所属し、コミュニケーションティーチャーとして活躍する俳優2名が中心となってコミュニケーションゲームを通じた場づくりと即興劇のシナリオ編成を行った。このようなスタイルはこれまでに、小中学校のコミュニケーション教育[7]、地域の防犯活動[21]、環境問題への取り組み[3]など多様な場で用いられてきている。本プロジェクトを含め、これらのワークショップでは、意見を取捨選択し

で物語を構築する技術、参加者に適切な配役を与える技術、練習時に適切な声かけをする技術といった部分に、演劇に関する高度な専門性を要するファシリテーションに基づく場づくりとなっている。これらの技術に長けた有能なファシリテーターを確保できない場合にはファシリテーターの教育投資や雇用という問題が生じ、継続的な活動を展開するにはコストがかかる[22]という課題がある。長期的な目標として多世代コミュニティづくりをめざして多世代演劇ワークショップを住民主体による継続的な活動とするには、そのためのファシリテーターとなる人材を育成していくシステムの構築が必要である。これらの点を考慮すれば、将来的に多世代共創コミュニティづくりをめざす活動の一環として、多世代演劇ワークショップが今後用いられ得る可能性があるといえる。

### 3) 本研究の限界

本研究には以下のようにいくつかの限界がある。多世代演劇ワークショップ参加者および面接対象者には、コミュニティ活動に積極的な人が多く、参加の前提として多世代交流に関して肯定的な印象を持っていた可能性があり、対象者に偏りがあることは否めない。面接結果では参加当初の「とまどい」は聞かれたものの、多くが肯定的な回答であり、このような交流活動に対し消極的な層に対しても、同様の結果がみられるかどうかは不明である。また、本研究の活動は2015年から2017年まで3カ年にわたって実施したが、「持続可能な多世代共創コミュニティづくり」や未病への取り組みの継続につながったかどうかや、複数回参加による参加者の変化は本研究では評価できておらず、ワークショップの継続開催とその評価は今後の課題である。

## 5. 結語

本研究では、多世代演劇ワークショップの参加者には世代を超えた親密感や結束、他者への尊重が生じ、世代間の交流が深まっていたことがわかった。多世代の参加者に対してこのような演劇ワークショップを開催することは、持続可能な多世代共創コミュニティづくりにおいて有用である可能性が示唆された。

### 謝辞

本研究は、JST-RISTEX「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域「未病に取り組む多世代共創コミュニティの形成と有効性検証」の助成を受けて実施した。本研究に参加した住民の皆様、開催協力をしてくださった町役場の皆様、劇団衛星、NPO法人フリンジシアタープロジェクトの皆様に深く御礼申し上げます。

## 引用文献

- [1] 大守隆. 持続可能な多世代共創社会のデザイン研究開発領域中間評価用資料, 2017; 3-4. [https://ristex.jst.go.jp/pdf/i-gene/JST\\_1115140\\_MR.pdf](https://ristex.jst.go.jp/pdf/i-gene/JST_1115140_MR.pdf)(閲覧: 2017年11月15日)
- [2] 糸井和佳, 亀井智子, 田高悦子, 他. 地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果文献レビュー, 日本地域看護学会誌 2012; 15: 33-44.
- [3] ME-BYO サミット神奈川実行委員会, 未病とは? 2015; <https://www.me-byo-summit.jp/about/> (閲覧: 2017年11月15日)
- [4] 神奈川県「マイ ME-BYO カルテ」ウォーキングキャンペーン 2017; <http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f532715/p1156872.html> (閲覧: 2017年11月15日)
- [5] 渡辺 賢治. 戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発)平成26年度研究開発実施報告書, 「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域研究開発プロジェクト「未病に取り組む多世代共創社会の形成と有効性検証」2014; [https://ristex.jst.go.jp/pdf/i-gene/JST\\_1115140\\_watanabe\\_YR.pdf](https://ristex.jst.go.jp/pdf/i-gene/JST_1115140_watanabe_YR.pdf) (閲覧: 2017年11月15日)
- [6] 蓮行, 鈴木 星良, 末長 英里子. 演劇ワークショップの政策実装に関する考察, 実践政策学 2016; 2: 203-209.
- [7] 蓮行, 平田オリザ. 演劇コミュニケーション学, 日本文教出版株式会社, 2016.
- [8] 宗像佳代, プレイバック・シアター入門【脚本のない即興劇】, 明石書店 2006; 61-62.
- [9] プレイバック・シアターとは, プレイバック・シアターらしんばん, 2006; <http://playbacktheatre.jp/playbacktheatre.html>(閲覧: 2018年5月10日)
- [10] 神奈川県. かながわ未病改善宣言 2017; <http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/871749.pdf> (閲覧: 2018年5月30日)
- [11] 木下康仁. ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリアプローチのすべて, 弘文堂 2015.
- [12] Ivey, Jean B. Somebody's Grandma and grandpa-children's responses to contacts with elders. The American Journal of Maternal/Child Nursing 2001; 26: 23-27.
- [13] 藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 他. 児童の高齢者のイメージに影響をおよぼす要因 "REPRINTS" 高齢者ボランティアとの交流頻度多寡による推移分析

- から, 日本公衆衛生雑誌 2007 ; 54 : 615 - 625.
- [14] 亀井智子, 糸井和佳, 梶井文子, 他. 都市部世代間交流型デイプログラム参加者の 12 か月の効果に関する縦断的検証—Mixed methods による高齢者の心の健康と世代間交流の変化に焦点を当てて—, 日本老年看護学会誌 2010 ; 14 : 16 - 24.
- [15] 藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 他. 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム : "REPRINTS" の 1 年間の歩みと短期的効果, 日本公衆衛生雑誌 2006 ; 53 : 702 - 713.
- [16] Yoh Murayama , Hiromi Ohba, Masashi Yasunaga, et al. The effect of intergenerational programs on the mental health of elderly adults, Aging & Mental Health 2015 ; 19 : 306 - 314.
- [17] Ryota Sakurai, Masashi Yasunaga, Yoh Murayama, et al. Long-term effects of an intergenerational program on functional capacity in older adults: Results from a seven-year follow-up of the REPRINTS study, Archives of Gerontology and Geriatrics 2016 ; 64 : 13 - 20.
- [18] WHO. Promoting Mental Health Summary Report;  
[http://www.who.int/mental\\_health/evidence/en/promoting\\_mhh.pdf](http://www.who.int/mental_health/evidence/en/promoting_mhh.pdf) ( 閲覧 : 2018 年 5 月 10 日)
- [19] 高尾隆. インプロ教育 : 即興演劇は創造性を育てるか?, フィルムアート社 2006 ; 149-154.
- [20] 三菱東京 UFJ リサーチ&コンサルティング, 地域包括ケアシステム構築に向けた制度及びサービスのあり方に関する研究事業報告書 2016 ;  
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12400000-Hokenkyoku/0000126435.pdf> ( 閲覧 : 2017 年 11 月 15 日)
- [21] 平田オリザ. 研究開発プロジェクト「演劇ワークショップをコアとした地域防犯ネットワークの構築」, 「犯罪からの子どもの安全」研究開発領域 プロジェクト事後評価報告書, JST 社会技術研究開発センター 評価委員会, 2013 ;  
[https://ristex.jst.go.jp/anzen-kodomo/pj\\_hirata/pdf/2.hirata\\_post.pdf](https://ristex.jst.go.jp/anzen-kodomo/pj_hirata/pdf/2.hirata_post.pdf) ( 閲覧 : 2017 年 11 月 15 日)
- [22] 谷口忠大. コミュニケーション場のメカニズムデザイン—自律性を活かす記号過程のための制度設計—, 第 39 回知能システムシンポジウム 2012.

\*責任著者 Corresponding author : e-mail [naho-watanabe.922@hotmail.co.jp](mailto:naho-watanabe.922@hotmail.co.jp)